當世新聞集

特
イ 8
171

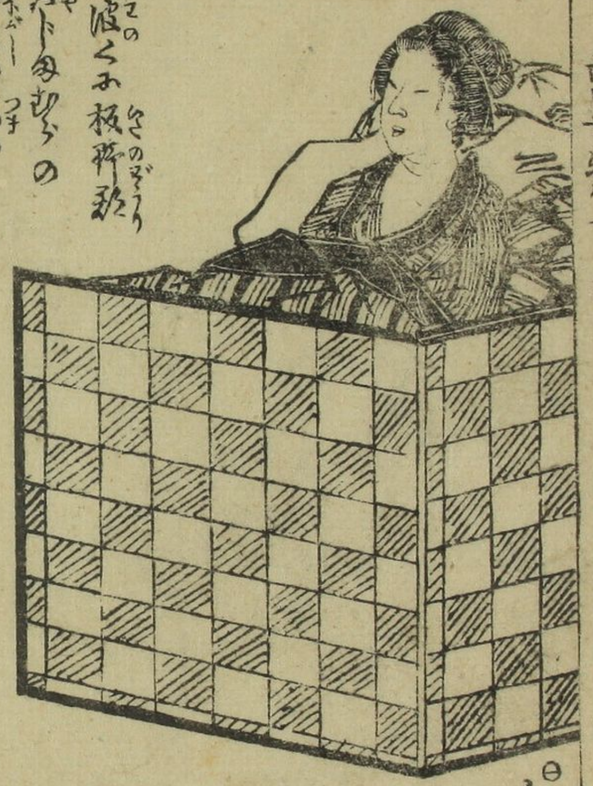
當世新聞集

昭和十三年四月二十八日

イ8
171

東京下谷金杉村ヨリ
加藤ヨリ家出ス
佐倉藩の娘おたしい
明治十年十月
△十日の夜十時ごろ
投引ガケの虎
まてとヨリ知れ入升こいと云と走ヨリ
孝心巡査ハ加下ヨリ
親人ヨリ出せんとおもひ更夜ヨリ
急ぐを止ム
氣の毒子
万左衛
他元もせばヨリ上飛の
山中ヨリ走リヨリ
巡査の何某的きり
あひつ欠落と咎められて
娘ハまをつき
親ハ
年老て神田
横田丁の兄丈ヘ此程ヨリ
居ヨリ
任ニ
投引ガケ
この家さを
急く夜ヨリ
保護の巡査の君ヨリ
伏ヨリ
別れ々ろ

阿波くみ板野郡
宮ノ下の
何ノ某の妻ハ
七年二十八の
わかちかりの
田舎ゐ稀ゐ色白と



まるゝ花前の小川へ
流せしとよ
これ
是がまるゝの
名ゑ童ゞ
男女同犬との
ゝ遠の
陰ゞ
此作

村中の笑ひものゝ
ゝ
手負の猪犬を殺生の
ゝ
ゝハ
ゐ
ゐ
ゐ

英国のタモスベイカ
くいろう人ハ東京
三美舎社ホ雇れて
居ちゝぶ女と仮で
偽妻つとり
困りて
居る所へ
舎社ハ
眠る沿さので
その日くにも
差迫りうゆて新宮の
横浜尾上丁の三木彩吉
の所へきてかり一居宅を

おどろき足遠を庭ホ
タモスベイカハ七頭
八例
の苦
足れば
鉄砲猛

おのふハ外へ飛出して
近所の人を呼ぶ
彩吉も大角て生筋人

かりビイルを数本
呑ろろぶ森ゝして
ゝれと屍瓜立切
薄くるよゝ来ホ
彩吉ハ用ゝ
幽彩当ち女房も
泣ホやきて妹の
おのぶハ兄一人
汗仕ゆを
考てゐる時
妻子の庭ホて
鉄砲の音の
考さのでおのふハ

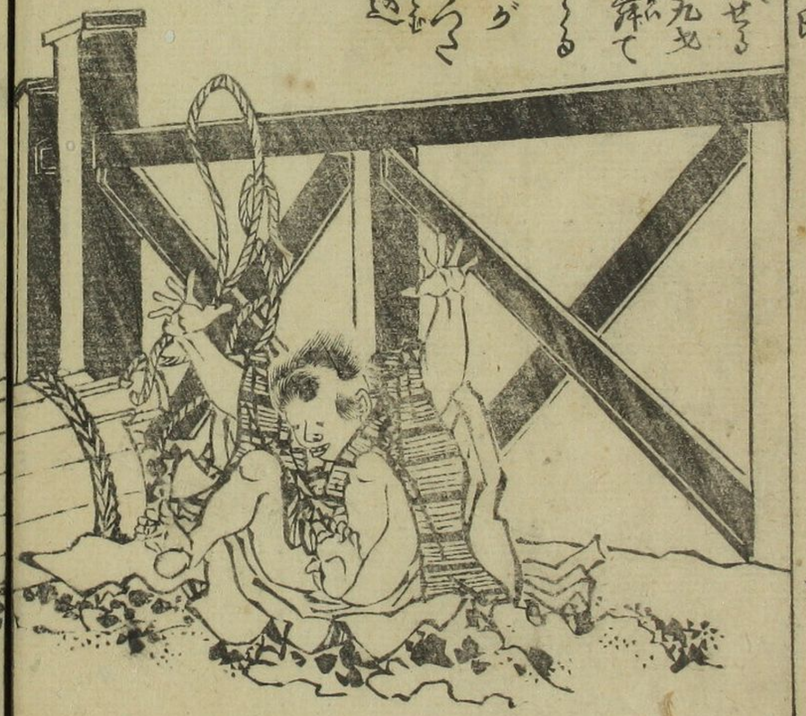
お屋敷ホ
足れハ

タモスベイカハ被ホ紙を
法口へ一度横抜へ一度自分で抜
死ゝる〻〻謹むべきハ考と酒日本人

うご
明後の医師因
牡丁源四郎、
同丁の貸座敷ふ
ずっせおこると深くあり
源氏ハ不可ありる
如何ぞ新敷せんと
あれと思ふあてもも
ふ所知恵人彼岸ゲ
西どふと笑ふて二人が
むるれはやう去つると
かっこつけ最上川の
逆巻中へ身世ハひとろ
ふとと死を
あけてつぶふ
ちろあるあり
かくてあるふて
人を却ー死ぐ也ー
揚るふ源氏ふの書の手ふて
改る母親より雑録代を世人ひ
おろろの樽桶を源氏ふの内へ
かつぎ込二ツ
三て九文濁香酒
こる砂糖浦舟
助けるるもの行人

東京伊世丁河岸ハ流せる
土清樽のらんくん壺ハ九文
のらんくん老酒の仕舞て
死るとなんハ来ること
泥田村の伊川辰五郎ガ
下肥をうつゐで流ることさ
桶の中へとんゑり死ぬ

くそだらけ
辰五郎ハ泥つくし
サア大変と騒くうち
頑童共ハ黄ろ
ありて逃もきる
やうの小法ハ



掌挾の臭ひもうのぞ
ゑハふ

くそくそ
ゆぞうの
糞数し
と
臭つまゝ
ゆ
ゆ
ゆ

夜も考へくとふけ渡り
影ゆる
燈も一時色
薄ふへてくるれの
声聞やりと考る
ありのつりさろて
又れハ毛たくけの
毛ホ驚きれ起と
ものけハ考つみ大盤石
大人ゑの腐由へキヤツト斗り
故きれバ又敵人ゑハ探と考り
コソ〳〵上欠うせり
西川の使さしき

お客をうへーて推せのうどりうちきの
お風ゝと時ゆうさよ 狐ハさろき△

清花梅ハ新焼
の江月所の
お陣中出雲の
内ハ多廣也
立退ホ使り
なる点しお客ハ
立つて抜
一ぐみ
やん詰て
功ゑ狐

當世新聞集

芳春筆

△
ハおてゝの
△

おさろ云じすざーむい
大坂戎座のせゝ居で
西南の
さいえんちう
和言中
かつてとびすい
小津者正
うらあいえーや
中村鶴雀ろ
ゆんこう
聯隊むさを
とう久へとところ
きりときなきりしきろ
桐の時秋嵐備三良
えんすいち
尺和一どゝかそれ
しゆつて
五尺よりの水を
ふつて嵐きろゝ
吹ゝけろるの
しつぽ
尻尾の火
大器き
ぶさ
ぎを
ぎをけせ
これ
見も一つの
ちんぐん
ぐり
と上を下へと

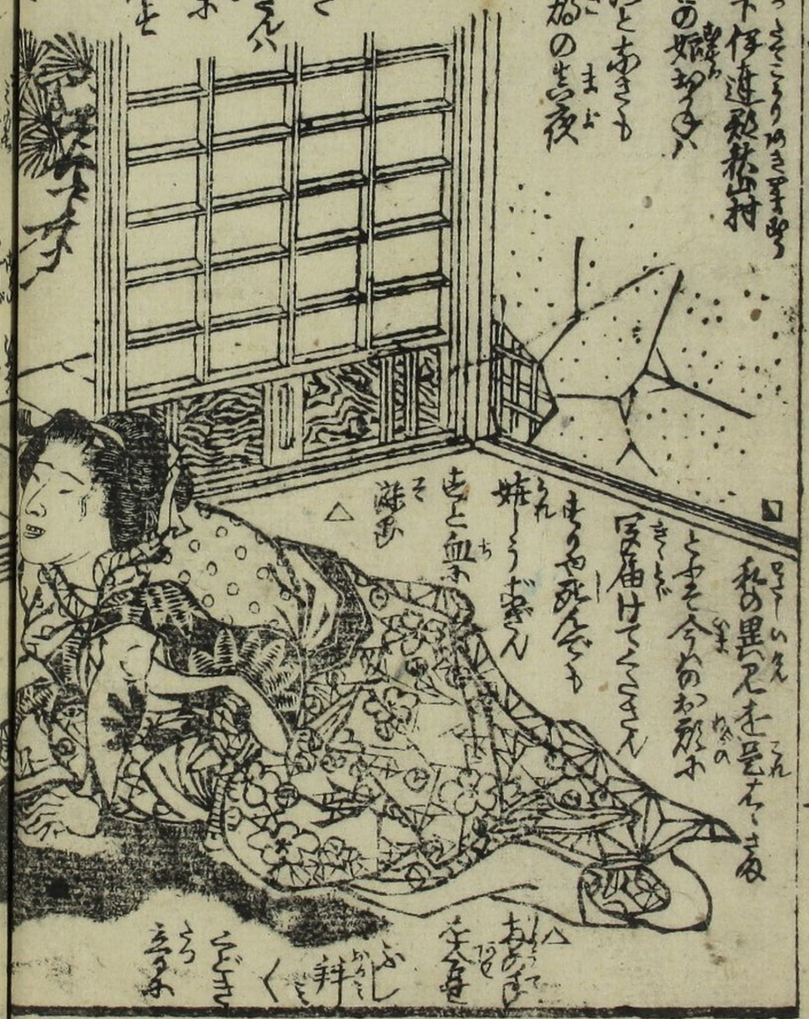
りまえんを
有人馬茶の組お中で足掛ハ
かくびをのゝ和あきくを巻る
ところ嵐横がのりしまの尻尾ゝ
ゆまりの火ゝをそうつり言のにゝ
ゆまりの
ゆまりくる者の脊中へかけつきアット
ゆげ
ゆして逃ゆぐ者嵐横いるより下へ
まつ
生きろさまゝ居ーまく
きぜがつちーろゝ

ぜんしゅう　ぶけ　ぶしゅう　ぶけ　ぶしゅう　ぶけ
禅宗武家武士武家
縫やの姫八月十五日ハ
小紅の祝るいへ女年始の
永吐ー　ぶけ　ぶしゅう　ぶけ　ぶしゅう　ぶけ
夜の座敷ハ武士武家
ひろうるるよりうるるげ
ーまぎ
陽田をもんぜと
つくこ　ぶし　ー　おるる
剃刀ぶそ　ぶけ　ぶしゅう　ぶけ　ぶしゅう　ぶけ

亞米利加級育の
池の中ゝ居る
大蛇ゝ今年
五十疋余の
子を產んざ
ゆへ
孫ゝ
四方八間の
硝子の
箱を造り
池の水ゝ箱へ是を居へ
食物を箱の内へ
毎月五六
たゝ日幸の拵らん食へ出せ

つゝうで
親蛇 壹丈八尺
子蛇 四五尺ゝ
二尺位まで

やゝまくんとそこらゆきまはり
福岩和下伊達郡荒山村
百姓七左の娘おつゆハ
年ハ十五の冬とあきくも
死る若殿の生夜
中ごろ
仏ゆふ
ホット
涙のきつき
情あい母さんハ
今ふ一回見ふ
あゝ孝ゝんを
父さんが
世やおさ



私の異見を見たゝ
とゝさま今のお別ハ
受届けてくださん
まりも死んでも
姉ゝうぎん
血と血ふ
涙ふ
おしあ
文金
拝
くゝ
ひどき
ふ

ん中時分ゝる村のろい村での評
むん年ハ切ねど四異見をまれば
ちる夜見ゝ見ゝ
おまゝゝ人ゝの父さん
たゝゝ世をれても
百日月と起ハ
さゝると母さんの男ゝひの号世
今ゝ父さんの年男一夜泊りの服を
出ゝ
異見ゝるゝ
ふ孝の臣泥ハの世とゝゝ
姫刀元ゝ
何ゝと
母のゝ
心ふ
近ふ
孝心の使ふや
ゆふ
実ふ
孝女ふ

孝行

當世新聞鑑
春葉

岩代の国福島十四丁目旅人宿
岡崎伊六八十余年を有福
を暮し常の手にこの鶴を
飼置是を愛し鼓を
打て雀ハ庭前にて舞を
まなんすと餅のかゝ時ハ
嘴をつく老人の袖をひく
有様長生の端相と
知られたりとさ
王子を加へ来て爺に渡す
其王子を二つに
切て盃とせし
一つハ

△今一つハ
東京の
親族へ送る
かゝる国出度
羽ぶれハ此程
御巡行の
時菊の

柳絮付
△板倉侯へ差上
△この
御盃を
賜り
又此程八
十七歳の
女を權
妻と定
寵光を
とれ誠よ
ゆてくさ
老人

東京新冨座の立者
尾上菊五郎の送り
長七とろハ休座の
法れぐ浅草
奥山の撃剣會
行て手あこの
程を×
×兄せん
そのと
友達引
連れ大手を
ふつて見ちまへ

⊕起きるひろうで来ると
しが解流し
友達ふみ把
されつりふ
這起きて
青葉ふ
右ハ
引連

ひけまぶ相手ふ
出しハ十七ハの
別品由へ太刀討
とろハひのてんぐ
組討せんと思ひふ
ヤット声ひけ
上段下段討合
太刀風梅香の
うほう長七先生下段ふ
月をつけ突出を水刀を
右手ふむちひ面下エイト
一本つれ大先生ハ真仰向
ちむーぶ樵月ルくろく⊕

若松縣下
南潟ハ山又
山の
辺り
木のまゝ
埋む
庵室へ小川村某の

狸の姿子
者らしも
有ける刻水で

嬢
おこち
とて心
安さん門口へおんさんお暇うございん
せんりと小児おろしを上り口引隠村へ帰りて
水くゝ〜の口ゑ健康者の小児も
たいそう生人サラく ゆうと休まちゆれ
さいの今夜ハ沸〜さゆ餅をゆのさ不進せまちゝ
云ふおこちハ逃走と又乃ち十四五十三神ハ待どの
四人焼ゆねのをむ〜ゆり〜食いゆ卦ケ市へ
倒れて森ゆ〜ふ両へハびつくり
差上つてゆれバ粗ゆハ年ありし。

つぶけ
扨つの子
生体顕に
村の若者
集りて
扨殺〜
酒の
ゆ

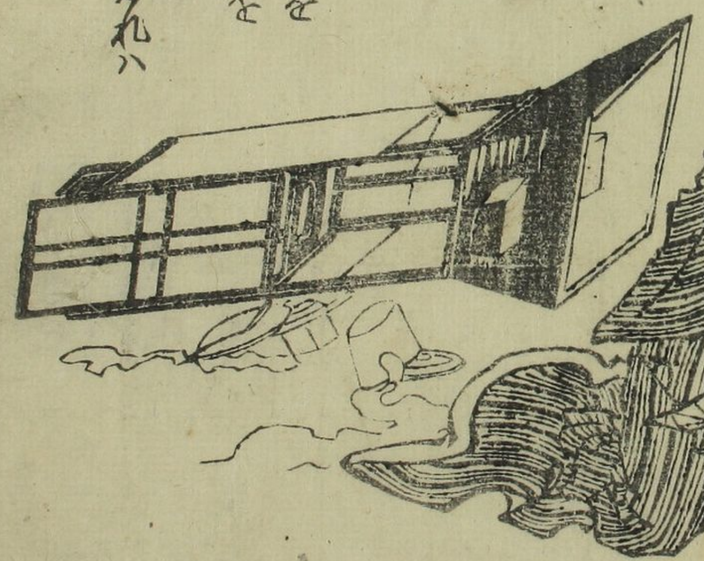
越前の国琴弁郡犀川ハ出水のひとの破れ魚梁
吹われ柳も水ながれてもさこれ夕間暮
三ヶ月形の鬢掻ぬ髪うさ
ひげて抱さ子を

ぎろりと
見やり
ひとり言
「養育
金と名を
つけて

まず小一里連て
ゆくて近西の和尚
仏と俗名の宗四郎
夫のまゝへもゆん
どうぞたべ
さまをこと
買つて
よこしまし
引給八食
を延もと
よろこんで
其ひ言葉

だまつて
ゑと三袁を
うけとるうへ
ぎやまるの
小男
ちかう
内へへ×
城のおや
このこゝろ
切りて
島の根
を曳て
ひの世へ遊逃を行
銭と塊り抑込
んで喰喰を
メて殺しゝ
知りて人あり
天網脱も
明治十年五月一川県
ゆて討首を成

東京
吉原町ホ
住貿渡世
甲傳兵衛孫
姪おらくハ年八十九の
ホッチャリ娘にて髪の
毛ハ駱駝
風呂敷色
をあげ
て捨て跡
白波と
逃げ



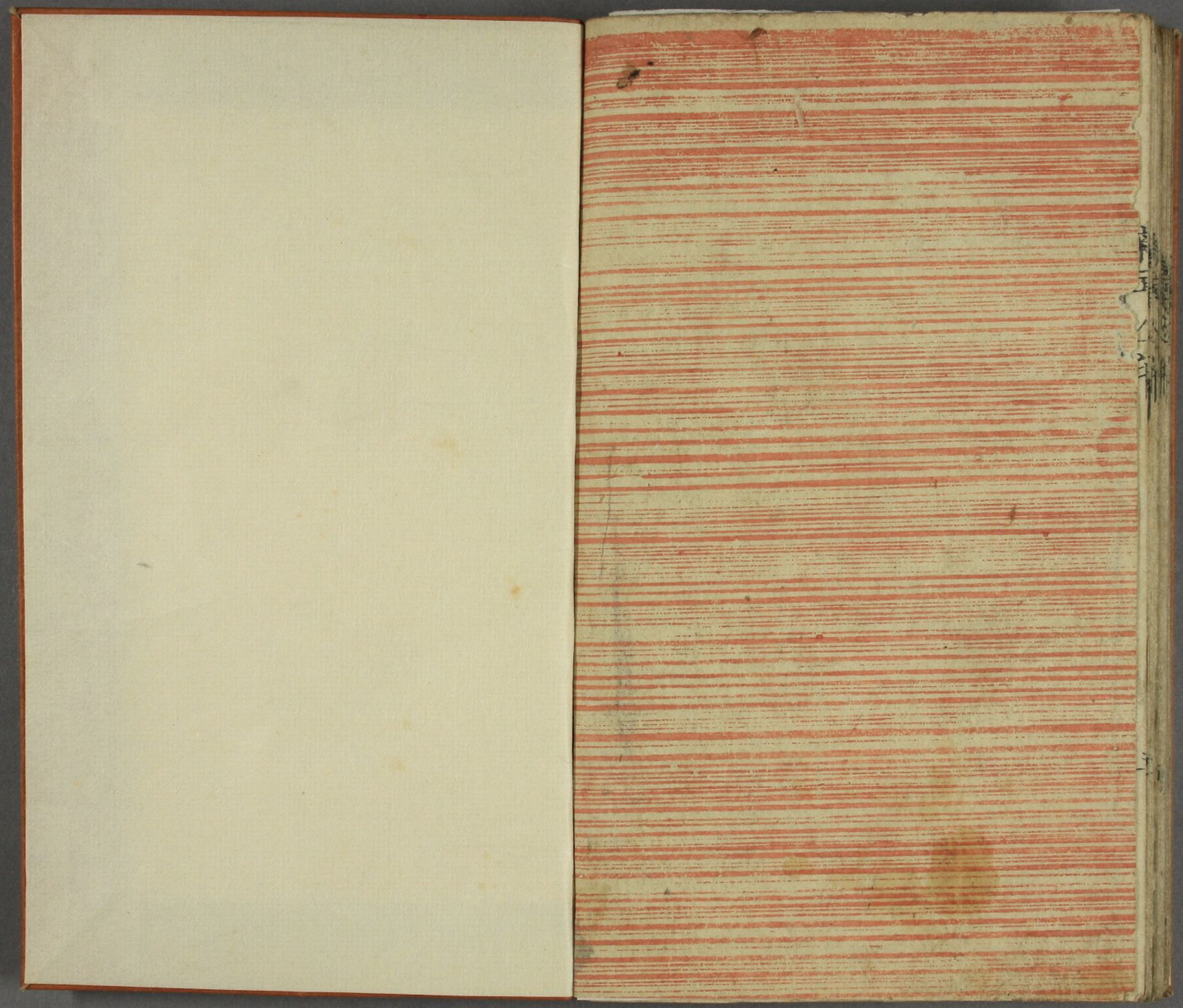
ちらつきし其うつくしさホ
盗人ハえとられて仏突く
その声ホ風と月を見し
起上り見れハ其れ
大の男ハ風呂敷色を
脊負ひ逃げんとせしを
おらくハ飛出しのぶり
女と侮りしかあさんと兎を
こぶけど足らけホ似合ぬ
女の力ホ必死とあつて捕合れハ
あさりホ声を振立て
泥坊〳〵と叫びたれハ
泥棒先ホ二ツ筋みそじ

明治十年六月十三日の
しるし

東京深川富岡町ゟ
住居いんまおなるハ
ゑびす宮子の彌祢と
檀吉の探合ろゝ
に付の指先

おゝ〜ゟ
中のそのうへゟ
恰町の
巫こゝ進と云
摩ゟも
下〜秋の
その下さを
いん振を

耳謂べのうへ三人
とも十銭々の
贖罪金て
事ゆゑ

恰ゟ等しき同を
むきかし恰町へ出ケ
途中出合かゝらゟ彌祢ハ
巫こゝ進と三言三言
たてハ双方
同ゝ〜討
来ゝるゝ春ハ
マアまゝ〜〜
留るゝ同ゝらの
挂木きゞり
不破ゟ名古屋も
同ゝ〜同志呆
あき内巡査ゟ引れ

芳春筆